

洋菓子のミルフィーユみたいな抽象も魅力的 デカルトに触発された洋画家

絵画、彫刻、デザイン、ファッション、音楽、文学、演劇など、大阪からは数多のアーティストが生まれている。現在、大阪大学総合学術博物館と豊中市立文化芸術センターの二会場で開催中の「四大文明の源流を求めて探究の旅、描きとめる熱情 洋画家中村貞夫」展の中村貞夫画伯も、大阪の生んだユニークなアーティストだ。

画伯は、昭和9(1934)年に西区の鉄工所に生まれた。戦後、優秀な小学生を集めた特別教室に通学し、同級生には、素粒子研究の権威で、高エネルギー加速器研究機構(KEK)の高松邦夫名誉教授や、作家の筒井康隆さんがいた。

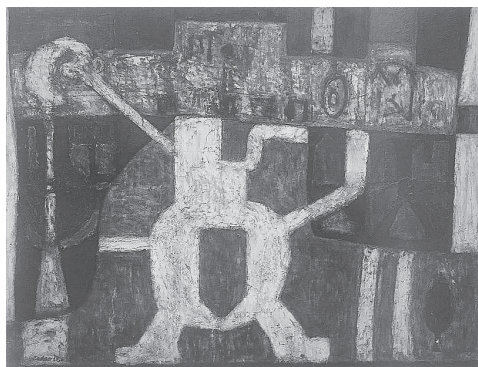
大阪府立大手前高校の一年生から油彩画をはじめ、美術部の夏期講習には、有名な小磯良平や伊藤継郎が招かれた。早くも高校三年生の昭和27(1952)年、「新制作展」に初入選する。

それならば、小磯がいる東京藝術大学へ進学かと思いきや、大阪大学文学部に入学した。フランス文学を専攻し、哲学演習でデカルトに触発される。「われ思う、故にわれあり」、画伯の創作哲学や絵画技法が理性的であるのは、その感化らしい。

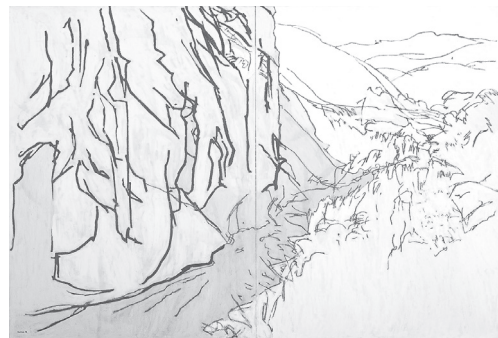
大正橋付近のガスタンクのある風景や難波の駅前など、市内を描き、旧大阪駅を描いた昭和28(1953)年の作品も、パウル・クレーのようで幻想的である。画面背後にある、この三代目の駅舎をご記憶の方にはなつかしい風景だろう。手前の不思議な形は、湾曲した駅前ロータリーも連想させる。

表紙は、中之島のフェスティバルホールで聴いた音楽会でのチェリストを描く。黄色の背景に青や赤の原色が散りばめられ、バリバリと画面から音があふれ出すようだ。

大学卒業後、トーマス・マンの小説『ヨゼフとその兄弟たち』を読んで、生け贄の動物を祭壇で焼き神に捧げる燔祭を知り、昭和36(1961)年から《燔祭》シリーズを始める。自分の油彩画も「美」に捧げる燔祭であるといった感情があった。ペイン



「大阪駅」1953年
画面上部に三代目の大阪駅駅舎を描いた。



「ユーフラテス川」2012年 四大文明に線が躍動する

ティングナイフで塗り重ねられた絵の具の層を、画伯はいつも洋菓子のミルフィーユにたとえる。横から見たら、絵の具がパリッと美味しそうに見えるかもしれない。

1970年代後半、西行の『山家集』を読み、吉野の桜を描いたことで大自然に関心を抱いて、抽象から具象に変化する。大峰山に分け入り、種子島、四万十川、土佐海岸などを描いた。

富士山のシリーズを経て、宝塚造形芸術大学(現宝塚大学)教授となる前年の平成6(1994)年、世界四大文明を題材とした連作へ突入する。この時のお歳は60歳である。タフガイとしか言いようがない。それも初の海外旅行だったらしい。第一シリーズの「エジプトシリーズ」では、ナイル川の源流から河口までの約6,700kmを取材旅行した。

次が「インダスシリーズ」、70歳を越えて「黄河シリーズ」がスタートする。最後の「メソポタミアシリーズ」は取材中、軍の車両とすれ違うなど緊張が走るが、ノアの方舟伝説のアララト山に達した。ロシアの知人から「中村の描く富士山はアララト山そっくり」と言われ、ぜひ描きたかったそうである。

最近では、あべのハルカスなどから、大阪の街を見下ろした雄大な「大阪シリーズ」に取り組む。生涯かけてゆくりと、しかし、新しいテーマを見出して画風を変化させていく。古今東西を問わず、時代とともに変貌することは、アーティストの力量であり、芸術家魂の発露であり、魅力である。

第一会場の阪大博物館(阪急石橋駅)に初期から「燔祭」「富士」シリーズまでが、第二会場の豊中市立文化芸術センター(阪急曾根駅)に「四大文明」が並ぶ。阪大博物館は6月30日まで、日曜休館。文化芸術センターは5月27日まで、月曜休館。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像」(創元社)など。